

逸脱する文学教材

—「異形」篇—

Deviant Educational Texts in Field of Literature : Literary Oddities

鈴木 愛理*・仁平 政人*・平井 吾門*・山田 史生*
Eri SUZUKI*・Masato NIHEI*・Amon HIRAI*・Fumio YAMADA*

要 旨

国語科で扱える「感性や情緒」、「ものの見方、感じ方、考え方」、「想像」、「心情」、「言語文化」には限度があり、広がりや深みが制限されてしまう。そこで、教科書に掲載することは不可能ではあるが人間の感情の本質に迫ることのできるテーマを扱った作品を示すことによって、教材発掘の一助としたい。今回は、「異形」を描いた作品として、現代文からは、江戸川乱歩『孤島の鬼』より「人外境便り」、古文からは大田南畝『一話一言』より「奇疾」、漢文からは『史記』呂后本紀から的一篇を提出する。

キーワード：国語科教育、現代文、古文、漢文

1. はじめに

国語科の「読むこと」では、「感性や情緒」、「ものの見方、感じ方、考え方」、「想像」、「心情」、「言語文化」について教育を行っている¹。しかしそれが学校教育である以上、限度があり、広がりや深みが制限されてしまうことは、いたしかたないことであろう。そこで、教科書に掲載することは不可能ではあるが人間の感情の本質に迫ることのできるテーマを扱った作品を示すことによって、教材発掘の一助としたい。今回は、「異形」を描いた作品として、現代文からは、江戸川乱歩『孤島の鬼』より「人外境便り」、古文からは、大田南畝『一話一言』より「奇疾」、漢文からは『史記』呂后本紀から的一篇を提出する。(鈴木)

2. 現代文

—江戸川乱歩『孤島の鬼』より「人外境便り」—

【本文】

さて私は、奇妙な雑記帳の内容を語る順序となつ

*弘前大学教育学部国語教育講座
Department of Japanese Language and Literature,
Faculty of Education, Hirosaki University

¹ 鈴木愛理、仁平政人、平井吾門、山田史生「逸脱する文学教材—嫉妬篇—」(『弘前大学教育学部紀要』第114号、2015、pp.25~34)に詳述。

た。系図帳の秘密が、もし諸戸²の想像した通りだとすれば、むしろ景気のよい華やかなものであったのに反して、雑記帳のほうはまことに不思議で、陰気で、薄気味のわるい代物であった。われわれの想像を絶した、人外境の便りであった。

その記録は今も私の手文庫の底に残っているので、肝要な部分々々をここに複写しておくが、部分々々といっても、相当長いものになるかもしれない。だが、この不思議な記録こそ、私の物語の中心をなすところの、ある重大な事実を語るものなのだから、読者には我慢をしても読んでもらわねばならぬ。

それは一種異様の告白文であって、こまかい鉛筆書きの、仮名ばかりの、妙な田舎なまりのある文章で、文章そのものも、なんともいえない不思議なものであったが、読者の読みやすいように、田舎なまりを東京言葉になおし、漢字を多くして、次に写しておく。括弧や句読点も、私が書き入れたものである。

助八さんにたのんで、ないしょで、この帳面とエンピツを、もってきてもらいました。遠くのほうの国では、だれでも心におもったことを、字で書くのですから、わたしも、半ぶんのわたしですよ、書いてみます。

² 諸戸…諸戸道雄。本作で探偵の役割を担う青年。

不幸（これは近ごろおぼえた字です）ということが、わたしにもよくよくわかってきました。ほんとうに不幸という字が使えるのは、わたしだけだとも思います。遠くのほうに世界とか日本とかいうものがある、だれでもその中に住んでいるようですが、わたしは生れてから、その世界や日本というものを見たことがありません。これは不幸という字に、よくよくあてはまるとおもいます。わたしは、不幸というものに、辛抱しきれぬようになってきました。本に「神さま助けてください」ということが、よく書いてありますが、わたしはまだ神さまという物を見たことがありませんけれど、やっぱり「神さま助けてください」といいたいです。そうすると、いくらか胸がらくになるのです。

わたしは悲しい心が話したいです。けれども、話す人がありません。ここへくる人は、私よりもずっと年の多い、まいにち歌を教えにくる助八さんという、この人は自分のことを「おじじ」といっています。おじいさんです。それから、物のいえない（哑というのです）三度ずつ、ご飯をはこんでくれるおとしさんと（この人は四十歳です）ふたりだけで、おとしさんはだめにきまっているし、助八さんもあんまり物をいわない人で、わたしがなにか聞くと、眼をしょぼしょぼさせて、涙ぐんでばかりいますから、話してもしかたがありません。そのほかには自分だけです。自分でも話せるけど、自分では気が合わないので、言い合いをしているほど、腹がたってきます。もう一つの顔がなぜこの顔と違っているのか、なぜ別々の考えかたをするのか、悲しくなるばかりです。

助八さんは、わたしを十八歳だといいます。十八歳とは、生れてから、十八年たったことですから、私はきつと、この四角な壁の中に十八年住んでいたのでしょう。助八さんがくるたびに、日を教えてくださいますから、一年の長さはわかりますが、それが十八年です。ずいぶん悲しいあいだです。そのあいだのことを、思い出し思い出し書いてみようとおもいます。そうすればわたしの不幸がみんな書けるでしょうとおもいます。

子供は母の乳を呑んで大きくなるものだそうですが、わたしは悲しいことに、そのころのことを少しも覚えておりません。母というのは女のやさしい人だということですが、わたしには母というものが少しも考えられません。母と似たもので、父というのがあるのも知ってますが、父のほうは、あれがそうだとすると、二へんか三べんあいました。その人は、「わしは

お前のお父つぁんだよ」といいました。怖い顔のかたわ者でした〔註³、ここにいうかたわ者とは、普通の意味のかたわ者ではない。読み進むに従い判明するであろう〕。

わたしが一ばんはじめにおぼえているのは、四歳か五歳のときのことでしょうとおもいます。それより前は、真暗でわかりません。その時分からわたしは、この四角な壁の中におりました。厚い土でできた戸のそとへは、一ども出たことがありません。その厚い戸は、いつでもそとから錠がかけてあって、押しても叩いても動きません。

わたしの住んでいる四角な壁の中のことを一どよく書いておきましょう。わたしのからだの長さをもとにしていきますと、四方の壁はどれでもおよそわたしのからだの長さを四つつないだほどあります。高さはわたしのからだを二つかさねたほどです。天井には板がはってあって、助八さんに聞くと、その上に土をのせて、瓦がならべてあるのだそうです。その瓦のはしのほうは窓から見えております。

今わたしのすわっているところには畳が十枚しいてあって、その下は板になっております。板の下には、もう一つ四角いところがあります。梯子をおりてゆくのです。そこも広さは上と同じですが、畳がなくて、いろいろな箱がゴロゴロとところがついています。わたしの着物を入れたタンスもあります。お手水もあります。この二つの四角なところを部屋ともいい、ドゾウともいいます。助八さんはときどきクラともいってま

す。クラにはさっきの土の戸のほかに、上に二つと下に二つの窓があります。みなわたしのからだの半分ぐらいの大きさで、太い鉄の棒が五本ずつはめてあります。それだから、窓からそとへ出ることはできません。

畳のしいてあるほうには、すみにフトンがつんであるのと、わたしのおもちゃを入れた箱があるのと（いまその箱のふたの上で書いております）、かべのクギに三味線がかけてあるだけで、ほかにはなんにもありません。

わたしはその中で大きくなりました。世界というものも、人のたくさんかたまっている町というものも、一度も見たことがありません。町のほうは本

³ この「註」および後の「中略」という記載は、本作『孤島の鬼』の語り手・箕浦によるものであり、本文の一部をなしている。

の画でみたきりです。でも山と海は知っております。窓から見えるのです。山は土が高く重なったようなものですし、海は青くなったり、白く光ったりする、大きな水です。みんな助八さんに教えてもらいました。

四歳か五歳のときを思い出してみますと、いまよりはよっぽど楽しかったようにおもわれます。なんにも知らなからでしょう。そのじぶんには、助八さんやおとしさんはいないで、おくみというお婆さんがいました。みなかたわ者です。この人がひよっとしたら母ではないかと、よく考えてみますが、乳もなかったし、どうもそんな気がしません。ちっともやさしい人ではなかったようです。でもあまり小さいじぶんだったので、よくわかりません。顔やからだの形も知りません。あとで名前を聞いておぼえているくらいです。

その人がときどきわたしを遊ばせてくれました。お菓子やご飯もたくささせてくれました。ものをいうことも教えてくれました。わたしはまいにち、かべをつたわって歩きまわったり、フトンの上によじのぼったり、おもちゃの石や貝や木切れで遊んだりして、よくキャッキヤと笑っていました。ああ、あのじぶんはよかった。なぜわたしはこんなに大きくなったのでしょうか。そして、いろいろなことを知ってしまったのでしょうか。(中略)

おとしさんが、なんだか怒ったような顔をして、今お膳を持っておりていったところです。おながが一杯の時は、吉ちゃんがおとなしいので、この間に書きましょう。吉ちゃんといってもよその人ではないのです。わたしのもう一つの名前なのです。

書きはじめてから五日になります。字も知らないし、こんなに長く書くのははじめてですから、なかなかかどりません。一枚書くのに一日かかることもあります。

きょうは、わたしがはじめてびっくりしたときのことを書きましょう。

わたしやほかの人たちは、みんな人間というもので、魚や虫やネズミなどとはべつの生きたものであって、みんな同じ形をしているものだということを、長いあいだ知りませんでした。人間にはいろいろなかたちがあるのだと思っておりました。それは、わたしがたくさん人間を見たことがないものだから、そんなまちがったかんがえになったのです。

七歳ぐらいのときだと思えます。その時分まで、わたしはおくみさんと、おくみさんの次にくるようになったおよねさんのほかには、人間を見たことがなかったのですから、あのとき、およねさんがなんぎ

をして、わたしの幅の広いからだをだき上げて、鉄棒のはまった高い窓から、その広い原っぱを見せてくれたとき、そこを一人の人間があるいてゆくのを見て、わたしはアッとびっくりしてしまっただけです。それまでにも、原っぱを見たことはありましたが、人間が通るのは一度も見ませんからです。

およねさんは、きっと「ばか」というかたわだったのでしょうか。なんにもわたしに教えてくれなからものですから、その時まで、わたしは、人間のきまったかたちを、ハッキリ知らなからのです。

原っぱをあるいている人は、およねさんと、同じかたちをしておりました。そして、わたしのからだは、その人とも、およねさんとも、まるでちがうのです。わたしは怖くなりました。

「あの人や、およねさんは、どうして顔が一つしかないの」といってわたしがたずねますと、およねさんは「アハハハ知らねえよ」といいました。

その時は、なんにもわからずにしまいましたが、わたしは怖くってしようがないのです。寝ているとき、一つしか顔のない、妙なかたちの人間が、ウジャウジャと現われてくるのです。夢ばかり見ているのです。

かたわということばをおぼえたのは、助八さんに歌をならうようになってからです。十歳ぐらいのときです。「ばか」のおよねさんがこなくなって、今のおとしさんに代ってまもなく、わたしは歌や三味線をならいはじめたのです。

おとしさんがものをいわないし、わたしがいってもきこえないらしいので、妙だ妙だと思っておりますと、助八さんが、あれはオシというかたわ者だと教えてくださいました。かたわ者というのは、あたりまえの人間とちがうところのあるものだと教えてくださいました。

それで、わたしが「そんなら、助八さんも、およねさんも、おとしさんも、みんなかたわじゃないか」と、いいますと、助八さんはびっくりしたような大きな眼でわたしをにらみつけましたが、「ああ、秀ちゃんや吉ちゃんは気の毒だね。なんにも知らなからのか」といいました。

今では、わたしは三冊本をもらって、その小さな字の本を、なんべんもなんべんもよみました。助八さんはあまりものをいいませんけれど、それでも長いあいだにはいろいろなことを教えてくださいましたし、この本は助八さんの十ばいも、いろいろのことを教えてくださいました。それでほかのことは知りませんが、

本に書いてあることはハッキリ知っております。その本にはたくさん人間や何かの画もかいてありました。それですから、人間というもののあたりまえのかたちも今ではわかりますが、その時は妙におもうばかりでした。

考えてみますと、わたしもずっと小さい時から、なんだか妙に思っていたことはいたのです。わたしには二つの、ちがったかたちの顔があって、一つのほうは美しく、一つのほうはきたないのです。そして、美しいほうは、わたしの思う通りになってものをいうことでも、心に思った通りにいうのですが、きたないほうのほうは、わたしが少しも心に思わないことを、うっかりしているときに、しゃべりだすのです。やめさせようとしても、少しもわたしの思う通りにならないのです。

くやしくなって、ひっかいてやりますと、その顔が、怖い顔になって、どなったり、泣きだしたりします。わたしは少しも悲しくないのに、ポロポロ涙をこぼしたりします。そのくせ、わたしが悲しくて泣いているときでも、きたないほうの顔は、ゲラゲラ笑っていることがあります。

思う通りにならないのは、顔ばかりでなくて、二本の手と二本の足もそうです（わたしには四本の手と四本の足があります）。わたしのおもう通りになるのは右のほうの二本ずつの手足だけで、左のほうのは、私にさからってばかりいます。

わたしは考えることができるようになってから、ずっと、何かしばりつけられているような、思うようにならない気持ばかりしていました。それはこのきたない顔と、いうことを聞かぬ手と足があったからです。だんだん言葉がわかるようになってからは、わたしに二つ名前のあること、美しい顔のほうが秀ちゃん、きたない顔のほうで吉ちゃんということが、どうしてもへんでしかたがなかったのです。

そのわけが、助八さんに教えてもらって、ようやくわかりました。助八さんたちがかたわではなくて、わたしの方がかたわだったのです。

不幸という字は、まだ知らなんだけれど、ほんとうに不幸という心になったのは、そのときからです。わたしは悲しくて悲しくて、助八さんの前でワーワー泣きました。

「かわいそうに、泣くんじゃないよ。わしはね、歌のほかになんにも教えてはならんと、いいつけられているので、くわしいことはいえぬが、お前たちはよくよく悪い月日のもとに生れあわせただよ。ふたごと

いってね。お前たちはお母さんの腹の中で、二人の子供が一つにくっついてしまって生れてきたんだよ。だが、切りはなすと死んでしまうから、そのまま育てられたのだよ」

助八さんがそういいました。わたしはお母さんの腹の中ということが、よくわからないので、尋ねましたが、助八さんは、だまって涙ぐんでいるばかりで、なんにもいわないのです。わたしは今でも、お母さんの腹の中の言葉をよくおぼえています、そのわけは教えてくれないので、少しも知りません。

かたわ者というのは、ひどく人にきらわれるものにちがいありません。助八さんとおとしさんのほかに、きっとそのほかにも人がいるのですが、だれもわたしのそばへきてくれません。そしてわたしもそとへ出られないのです。そんなにきらわれるくらいなら、いっそ死んだほうがいいとおもいます。死ぬということは、助八さんは教えてくださいませんけれど、本で読みました。しんぼうできないほど痛いことをすれば、死ぬのだと思います。

むこうで、そんなに私をきらうなら、こちらでもきらってやれ、にくんでやれという考えが、ついこのごろできてきました。それで、わたしは、ちかごろは、わたしとちがったかたちの、あたりまえの人を、心のうちでかたわ者といってやります。書くときにもそう書いてやります。

【解説】

『孤島の鬼』（初出『朝日』、1929・1～30・2）は、江戸川乱歩の長編の中でもしばしば「最高傑作」と評される、代表的な作品である。そのうちの中盤の一章「人外境便り」をここに採録した。なお、本文は『江戸川乱歩全集』第3巻（講談社、1978年）にもとづく。

『孤島の鬼』は、白頭の青年・箕浦金之助が、自身の頭髪を真っ白に変えた「世人が嘗て想像もしなかった様な、あの奇怪事」について綴る手記という形式の小説である。こうした枠組みの下、本作は、前半では密室殺人・衆人監視下の殺人という二つの謎をめぐる推理、後半では暗号解読とそれを通した宝探し、そして地底の迷路の恐怖に満ちた冒険という異質な展開（本格探偵小説／冒険小説）を融合させ、その上に、恋人を失った箕浦の復讐譚や、探偵役の青年・諸戸が箕浦に寄せる同性愛…など多様な要素を折り重ねるようにして成り立っている。が、さらに特筆されるべきは、本作が、近代社会の通念的な身体観からは「異

形」と見なされるような〈イレギュラーな身体〉の表象を横溢させているということだ。実際、本作に描かれる事件の中核にあるのは、その容貌・障害ゆえに虐げられてきた男が、「正常人類への復讐」として取り組む人工的な「不具者製造」なのである。ちなみに寺山修司は、『孤島の鬼』を含めた乱歩の小説における「畸形」のモチーフについて、「殺人の因果を、一寸法師の不具的肉体の因果とかさね合わせる」という定型的な物語性を持っていると指摘し、基本的には「等身大人間の優位を保証する」差別的な機能を持つと論じている（寺山、1993年）。この指摘は、乱歩の小説における「異形」の表象が、本質的には「正常／異常」にまつわる社会的な規範を温存・追認するものであることを突いた批判であると言えよう。ただし、小説『孤島の鬼』の全体が、こうした批判によって回収されるというわけではない。

本文として収録した「人外境便り」は、主人公たちが発見した「奇妙」な手記の内容が紹介される章である（この手記の引用・紹介はほぼ三章分にわたっているが、紙幅の関係で本論では最初の一章のみを採録）。この手記は、赤ん坊の頃に別の子とも「無理にくっつけ」られて「癒合双体」（いわゆるシャム双生児）にされ、監禁されて育ってきた少女（「秀ちゃん」）が綴ったものである。彼女は小さな「ドゾウ」の中での経験と、ごく少数の人との関わり、そして三冊の本から得た知識を手掛かりに、自らの生い立ちと、現在の「不幸」を語ろうとする。重要なのは、この手記の言葉が、彼女の置かれた特異な状況（身体）を立脚点として綴られているということだ。例えば、彼女は二つの頭、四本ずつの手と足を持つ身体を「わたし」と呼び、手記を書き進める自身のことをあくまで「半ぶんのわたし」とする（もともと「ふたご」＝「二人」であることは、すでに聞かされているにもかかわらず）。また、自身の住む部屋について、何の説明もなく、自分の体の大きさ（本来、二人分の幅がある）を基準として示す。こうした記述は、読者が暗黙の前提とする常識的な視点を揺さぶり、異化する豊かな力を持つと言えよう。

さて、この章の中心をなすのは、「わたし」が他の人間の「かたち」を知り、「不幸」という感情を抱くに至る過程である。ここに鮮やかに描かれるのは、他の人間の姿を知ったときに彼女が抱く、強い違和感に他ならない。——「わたしは怖くってしようがないのです。寝ているとき、一つしか顔のない、妙なかたちの人間が、ウジャウジャと現われてくるのです」。自

身にとって自明な身体イメージとは異質な他者に対する、この素朴にして強烈な恐怖・嫌悪の情は、「異形」と見なされたものに対する社会の差別的感覚を、鏡のように映し出すものだろう。やがて彼女は、他者の言葉によって、自身が「あたりまえの人間とちがう」存在だという意識を、残酷に内面化させられることとなる。自身にとっての「あたりまえ」が、ほかの人間から隔絶したものであること、彼女が抱く「世界」から隔てられているという「不幸」の核心は、何よりもここにあると考えられよう。だが、彼女は、他者たちの「あたりまえ」の基準をそのまま受け入れるわけではなく、自分を排除する（かのような）他の「顔が一つしかない」人間たちに向けて、憎しみとともに「かたわ者」という言葉を投げかけ続ける——。

こうした手記の言葉は、自らの「正常」さ（そして容貌の美しさ）を傲慢に誇示するような『孤島の鬼』の語り手・箕浦の言葉と鋭く対立し、相対化する強度を持つと言えよう。本作における「異化された身体へのオマージュ」（田口、2006年）の可能性の所在もまた、ここに見いだされるように思われるのである。

なお、上記でも示した通り、本文には今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句・表現が数多く見られる。が、作品の時代背景と、そうした表現の問題性を検討する本稿の趣旨から、そのままとしたことをお断りしたい。（仁平）

3. 古文 一大田南畝『一話一言』より「奇疾」一

【原文】

上野国沼田郡沼田村曹洞宗玉泉寺の末寺同郡座麻村広福寺住僧勇亮長老、其性凶悪にして師の和尚讎をも兩度殺害せんとせしほどの僧なるよし、此広福寺門前に一人の寡婦あり、家貧なれば素より独住なり、いつのころよりか勇亮この寡婦に密通して折々通ひしに、又近きわたりのたわれ男両三人も忍びて通ふよしを聞て、勇亮いかりにたへず、或夜ひそかに斧を提て行てかの寡婦が頭上より割下し、死体を刀根川の淵にしづめぬ。家に人なければ知者なし。淫婦は人にいさなわられて家を出行しならんと、近隣の人々も尋る事なくてやみぬ。さて其後日をへて勇亮背中に奇腫を發し、日ならずして其形状女陰のごとく、漸々陰毛を生じ真の陰門のごとし。さしもの悪僧、慙愧恐懼にたへずといへども、人に語るべくもなく、医を頼むべくもあらず、治療する事あたはず月日をすぎ、今は膿血も出ず疼痛臭気もなく、痒こともなく自然生れつきたるがご

とし。せんかたなければ罪障滅除のため西国三十三所の観世音を順拝せんと思ひ立て、寺を他の僧へ譲りて広福寺を退き、去年己卯の初秋旅立て七月十四日小浜空印寺へ立寄る。然に今方丈に随従せる恵亮と云僧、勇亮と弟子兄弟なれば久々にて対面を悦び、折から夏中なれば数日淹留すべしと止て、方丈役寮へも申届、衆寮におらしむ。勇亮も兄弟の名ある恵亮なれば、傍に人なきをりを得て、ありし事ども、自ら犯せし罪条を語り則肉袒して背をみするに、恵亮うかがひ見て肝をけし驚しが、云べき詞もあらざれば、只罪のほろびんは懺悔にしく事あるべからず、衆僧にも語られよとすすむれども、曾てうけひかず、却て恵亮を疑ひ、此事他聞にもらさば其ままには置まじと云により、只心中に慙愧するばかりなり。されども不便なることに思ひて少なりとも罪をかるめやり度、人なき折を伺ひ方丈へ来り、道海和尚へ子細を告ぐ、和尚も奇代のこといぶかしくも思はれて、一度見ん事を望む、恵亮も罪障消滅のため和尚にも見せたく思へども、再び勇亮へ云出る事も叶はねば、さまざま考へ工夫して、晩来彼僧湯をひく折をまつて覗き見給ふべし、其心得すべしとて夕べをまち、寮の庭に盥を居へ、外面の方を向はせ背をうしろ此方になるやうに仕度しぬ。さて勇亮が行水にかかるを待て方丈へ告ぐ、和尚も見咎められなばいかなる騒動を引出さん計がたくて、恐る恐る衣をかかげてさし足して、連子窓の破たるひまよりのぞき見られしに、恵亮が云しに露ばかり違ふ事なく、今は年月も経しにや、陰毛なかば白毛交りて見ゆ、此僧当卯四十四歳になりぬるよし、同年の霜月道海和尚物がたりありて、猶恵亮をも其席へ呼出して委き事を語らしめられし。勇亮は順拝をいそぎて七月十七日空印寺を辞して出ゆきしとなん。積悪の殃報面りなることゆへ例の矢立腰より取出て記す。

当正月空印寺へゆきし時、彼悪僧の終りいかに成しやらんと問しに、彼順拝をとげてのち又関東へ戻りぬ。上州神戸清水寺の近所に洞源寺といへる小寺あり、檀家なくして寺退転せしを、近ごろ本寺より再建をなさしめて形ばかりの小庭をむすび、爰に勇亮を居らしめて旧冬より此寺に住りと。

清水寺は天産和尚此寺より空印寺へ入院なり。

【現代語訳】

上野国沼田郡沼田村曹洞宗玉泉寺の末寺である広福寺で長老として君臨する僧侶勇亮は、無茶苦茶凶悪な人物で、かつて師である和尚を二度も殺そうとしたほどであった。

この広福寺の門前には、夫と死別して貧しく一人暮らしをしている女性がいた。いつの頃からか勇亮はこの女性と密通するようになり、しょっちゅう通うほど入れ込んでいた。ところがこの女性、勇亮とは別に二三人の遊び人とも密かに関係を持っていたのである。そのことをついに耳にした勇亮は、怒り狂った。ある夜、こっそり斧を持って行くと、女性の頭を脳天から両断し、死体を利根川の淵に沈めてしまった。女性は一人暮らしだったので、勇亮の凶行を知る人もいない。近所の人、「どうせ性欲の赴くままに誰かについて行っていなくなったのであろう」などと噂し、女性の失踪については特に問題にもしないでこの件は終わってしまった。

さて、女性を殺してから数日経ったある日、勇亮は背中に奇態な腫物を発症した。ほどなくその腫物は女性器のような形になり、徐々に陰毛も生えてきて、まさに女性器そのものの形になってしまった。極悪人であるとは言え、さすがに勇亮は恐れおののき、自らの行いを大いに悔いるのであった。とは言いつつも、誰かに相談することもできなければ医者にもみせられないので、治療することだってもちろんできない。そんなこんなで月日が経って、今では膿や血も出ないし、疼くこともなくなった。もちろんもう臭ったりもしない。痒みすらなくて、生まれた時からそこにあるような状況である。

もうどうしようもないので、何とかして悪行によって生じた祟りのような状況を改善すべく、西国三十三か所の観音巡りを思い立った。広福寺を他の僧侶に譲ると、去年の初秋に旅立って、七月十四日には小浜の空印寺に立ち寄った。その寺には住職のお付きを務める恵亮という僧侶がいたが、彼は勇亮と兄弟弟子の関係にあったため、久しぶりに対面を果たしてとても喜んだ。暑い日も続くししばらくここにいたらどうだと言って、事務的な手続きも済ませて、宿舎に逗留させることにした。

相談相手もなかった勇亮であるが、兄弟弟子の恵亮であれば心を許せると思って、他に人がいない折、自分が犯した行いやその顛末について恵亮に語ると上半身裸になって背中を見せた。恵亮は「どれどれ」とそれを見て吃驚仰天、かける言葉も見つからず、「罪滅ぼしにはひたすら懺悔するしかない。他の僧侶たちの前で懺悔しようよ」と勧めるのが精いっぱいであった。しかし勇亮は受け入れるはずもなく、むしろ恵亮が信用できなくなってしまい、「今見たことを誰かに話したらただじゃ済まさない」と脅しをかけてきた。

恵亮は、「失敗したな……」と反省したが、そのままにしておくのも不憚であり、少しでも罪を軽くしてあげたいと思った。そこで、他に人がいない時を見計らって、道海和尚のところへ行くと詳細を報告した。さすがの和尚もあまりに奇妙な話なのでどうにも信じ難く、「背中 of 女性器を一度見てみたいものだ」と所望した。恵亮は、勇亮の罪を何とか取り除くためにも和尚に背中 of 女性器を見てもらおうと思ったが、もう勇亮を説得することは難しかったので、いろいろと頭を使って策を練った。そして、「夜、勇亮がお風呂に入る際に覗き見ましょう、よろしいですね」と和尚に提案した。宿舎の庭にタライを持ってくると、勇亮の背中が建物から見えるように、諸々うまい具合に設置した。

やがて勇亮が水浴びを始める時間になったので、恵亮は和尚に知らせた。和尚は、覗きがばれたらどんな大騒動になるか予想もつかないので、おっかなびっくり衣服を持ち上げこっそり近づくと、格子窓の壊れた隙間から覗き見た。すると、恵亮が言っていたことと少しも異なることなく、確かに背中に女性器を付けた勇亮の姿がそこにあった。女性殺害事件からだいぶ年も経ったのであろう、陰毛には白髪も交じって見えた。

勇亮はもう44歳になっていたのである。同じ年の11月、道海和尚がこの話を語り、恵亮もその場に呼び出して委細を語らせたものである。勇亮は観音巡りの旅を急ぎ、7月17日に空印寺を出立していったという。以上の話は、悪行の報いを受けた結果であることは明々白々の事実であり、いつものように急いで書き留めておくものである。

その後、勇亮は洞源寺という小寺に移り住んでいるということである。

【解説】

『一話一言』は、狂歌師として名高い江戸時代の文人・大田南畝（1749-1823）による随筆である。執筆期間は40年に及び、「その範囲は森羅万象にわたる」（『日本古典文学大辞典』明治書院）とも評される大著である。内閣文庫には自筆本の大半が収められているが、その他諸本の組み合わせで本人作と疑わしい部分も含めて活字化されている。現在は、『日本随筆大成新版別巻』で読むのが簡便であり、本文も基本的に同書に寄った。本話は『広文庫』（物集高見）にも引用されており、その特異な設定から単体でも強烈な印象を残す。

古典に対する拒絶反応を緩和するために、或いはアクティブラーニングの一環として、「古典に題材を取った近現代小説や漫画、映画を鑑賞させる」「古典に描かれていない、或いは正確に読み取ることができない細部には拘らず、想像を膨らませて新聞や劇などの二次創作をさせる」といった取り組みが広く行われていることは周知の如くである。本話も、その目を引く設定と語りのテンポの良さから、古典初学者である子供の心を掴む道具として積極的に利用され得るものである（学校の図書室に、古典の性的な内容を取り上げる書籍が置かれることも無いわけではない）。その際、次のような「分析」を、子供たちが面白おかしく行うことは容易に想像できよう。

「全員悪人。」というキャッチフレーズの映画がかつてあったが、一見するとこのエピソードにもそれは当てはまる。人殺しで悪逆非道の勇亮はもちろんのこと、殺された女性も相当な遊び人であり、独身とは言え性的モラルの欠如が目を引く。失踪しても近所の人に心配すらされないことがそれを如実に表している。恵亮は、勇亮との約束を違えて師匠にチクる。兄弟弟子の罪を軽減する為と言いつつも、自己解決の道を探ることなく、師匠に伝えることで自らが楽になる道を選ぶのである。いずれ自ら住職となり、一人だけの力で物事を解決せねばならない状況になったとき、いったいどうしようというのであろうか。師匠は師匠で、「自分の目で見ないと信じられない」などと言って弟子の言うことを信じない上に、少年のようにドキドキとスリルを味わいながら女性器を覗き見るのである。更には、「まさに女性器そのものであり、うっすらと白毛の陰毛すら生えているのは年をとったからだ」などと判断するのは、まさに様々な年齢の女性器について造詣が深いから為せる業であり、僧侶としての立場を疑う。そして、この話を公表前提でメモった南畝もまた、実名を挙げた他人の不幸で「いいね！」の獲得を目指す現代SNSの暗部を江戸期において体现するかの如くである――。

そもそも、古典において異形に題材をとるものは少なくない。おとぎ話として現代にも広く伝わる話は、桃太郎にせよ一寸法師にせよかぐや姫にせよ、基本的には異形の物語であると言って良い。だからこそ、古典に限らず異形を描く際には、「異形というモチーフを通して何を伝えるか？」が大切であるのは言わずもがなである。その中で、特に古典において気を付けねばならないのが、現代との乖離という視点である。本話の場合、背中に女性器が「発症」するという状況

は、現代においても極めて特異であることは間違いない。背中に女性器が現れることが本話の核であるからこそ、「奇疾」と題されているとも考えられる。

しかし、その「奇」とされる基準が現代とどのようなレベルで共有できるのか、という点は全く自明ではない。もしかしたら、「奇疾」とは、女性器に翻弄される僧侶たちを一括りに揶揄した言葉であるかもしれない。本話には、主人公(?)が改心して高僧となったり、非業の死を遂げたりするというオチはなく、ルポルタージュのように淡々と出来事が記載されている。そして、そのように淡々と描かれる随筆だからこそ、筆者の生きた時代やそこで生まれた思想を探る必然性が出てくる。本書あるいは本話の真髓を味わうためには、人物関係や時代背景を考証して、大田南畝の人となりを感じながら、その目を通して描かれた世界を堪能する必要がある。その時初めて、「奇疾」という項目に込められた意味が論ぜられるのであろう。

高等学校までは、単語と文法事項を抑えて文章の内容を理解するだけで古典学習の大半が終わる。しかし、もちろんその先にこそ文学の醍醐味がある。教科書には、意識して文章全体の意味が取れたとしてもまるで子供たちの興味をそそらない古典作品が多い中で、本話のように現代の若者を強く惹きつける作品は、「アクティブ」を求めた古典学習の導入として扱われがちである。しかし、「異形」のように一見現代の感覚でも分かりやすいモチーフであるからこそ、現代との差異を徹底して考察することが求められる。初学者のための導入ではなく、大学における本格的な文学研究への導入としてこそ、本作品は大きな意義を持つのである。(平井)

4. 漢文 — 『史記』呂后本紀より—

【原文】

太后遂断戚夫人手足、去眼燂耳、飲瘖藥、使居廁中、命曰人彘。居数日、迺召孝惠帝觀人彘。孝惠見問、迺知其戚夫人。迺大哭、因病、歳余不能起。使人請太后曰、此非人所為。臣為太后子。終不能治天下。孝惠以此日飲、為淫樂、不聽政。故有病也。

【書き下し文】

太后、遂に戚夫人の手足を断ち、眼を去り耳を燂し、瘖藥を飲ませ、廁中に居らしめ、命づけて人彘と曰う。居ること数日、迺ち孝惠帝を召して人彘を觀しむ。孝惠見て問ひ、迺ち其の戚夫人なるを知る。迺ち

大いに哭し、因って病み、歳余、起つこと能わず。人をして太后に請わしめて曰く、此れ人の為す所に非ず。臣、太后の子為り。終に天下を治むること能わず、と。孝惠、此れを以て日に飲み、淫樂を為し、政を聴かず。故に病有るなり。

【現代語訳】

太后は、戚夫人の手足をぶったぎり、眼をくりぬき、耳をやきつぶし、啞になる薬を飲ませてしゃべれなくし、これを便所に転がして、「人豚」と名づける。放置すること数日、孝惠帝をよびつけ、これ見よがしに人豚を指さす。孝惠帝はしばしこれをながめ、いったいこれは「なに」なのかとたずね、それが戚夫人であることを知る。狂ったように泣きわめくと、そのまま心身をわずらい、一年余りも寝たきりになる。ひとをやって太后に伝える。「およそ人間のなしうる所行ではありません。あろうことか、それがしは鬼畜のせがれ。とうてい天下をおさめる資格などありません」。爾後、孝惠帝は、のべつ酒を飲んだくれ、ほしいままに淫樂にふけり、てんで政治をかえりみようとせず、すっかり廢人同然になりはてる。

【解説】

出典は『史記』呂后本紀。秦がほろび、項羽と劉邦とが覇権をあらそう。垓下の戦いで勝った劉邦は、国号を漢とし、長安を都とする。その糟糠の妻・呂后は、則天武后、西太后とならび称せられる悪女である。劉邦の愛妾・戚夫人は、呂后よりうんと若く、おまけに美貌であった。劉邦とのあいだに如意をもうけると、これを後継者にすべく画策する。すでに呂後の産んだ孝惠という皇太子がおり、もとより後継ぎになるのが筋ではあったが、劉邦はおとなしい孝惠をうとんじ、如意をかわいがる。劉邦の存命中、呂后はネコをかぶっていたが、ハラワタは煮えくり返っていた。劉邦が急逝するや、孝惠が即位する。皇太后となった呂后は、おとなしい息子を尻に敷いて実権をにぎる。呂后は、まずは目ざわりな如意をあっさり毒殺すると、やおら戚夫人への復讐にとりかかる。戚夫人の両手両足をきりおとし、眼球をえぐりとり、両耳をひきちぎり、ノドをやきつぶすと、便所に放りこむ。便所には、人間の排泄物を始末させるためにブタが飼われている。悪臭ただよう汚物のなかに戚夫人のなれのはての肉塊を転がすと、これに「ひとぶた」と名づける。呂后は「おもしろいものがあるから、いらっしやいな」と孝惠をよびにやる。孝惠がおそるおそる見て

みると、汚物まみれの芋虫のようなピンクの肉塊がうごめいている。「ひとぶたっていうのよ。めずらしいでしょ」と薄笑いする呂后。ひくひくと不気味にのたうっている肉塊の正体を知るや、孝恵はショックで人事不省になる。それからというもの孝恵は、みずから命をちぢめたがっているかのように酒色におぼれ、ボロ切れのようになって死ぬ。げに恐ろしきはひとのこころ。ウンコまみれの肉塊よりも、それをながめて薄笑いする呂後のありようのほうが、よほどグロテスクである。(山田)

5. おわりに

以上、「異形」をテーマとした作品を現代文・古文・漢文から1作品ずつ提案した。

「異形」とは、「普通とは異っていること」であり、「普通」という基準があることを前提としている。もっと言えば、「普通」であることが「正常」であることを前提としている。しかし、「普通」とは何なのか。

「普通」とは、多数派のことではない。だからこそ、それは「正常」であるとみなされやすいが、絶対的な正しさをもつのではない。「普通」は「正しさ」を相対的なものとして突き付けてくるのである。それは、すこし落ち着いて考えてみれば、異常な振る舞いであり、ときに暴力でしかない。そのようなことから、「異形」は隠されるものであったり、晒されるものであったりしてきたのではないだろうか。古文や漢文で示した作品には、そうした「異形」の性質についてふれているだろう。

一方、「異形」とみなされる側にとっての「普通」というものも存在する。自らが「異形」であることは、本人にとって当然「普通」のことである。「異形」なものが存在することが世界にとっての「普通」であるかもしれない。さらに言えば、自分を基準として「普通」を考える場合、世の中にとっての「普通」は「異常」として捉えられるだろう。現代文で示した作品は、こうした「異形」の側からみた世界観が表現されている。

「異形」について考えていくことは、「普通」の側に立つ(と思っている)者の視線や世界観をゆさぶるのみならず、「普通」と「異形」の境目を曖昧にしたり、立場を反転させてみせたりすることを可能にする。

国語科の読むことの領域では、「文章に表れているものの見方や考え方」を捉え、「自分のものの見方や

考え方」を広げたり(中学一年生)、自分の知識や体験と関連付けて自分の考えをもったり(中学二年生)すること、また「文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと」(中学三年)が求められている(平成20年版・学習指導要領)。教科書で扱える「ものの見方や考え方」には限界があるので、多くの学習者は読解指導や教室での対話を踏まえることで、最終的には「自分の考え」なるものを持ち、すらすらと述べられるようになるのではないかとと思われる(それが本当に「自分の考え」であるかはさておき)。「自分の意見」をもつこと、あるいはそれを示すことが難しいような「ものの見方や考え方」に触れる機会を教室のなかにつくることは、非常に困難である。教室で(真の意味での)「他者」と出会うことは難しい。

「逸脱する文学教材」は、教室や教科書といった決められた範囲では出会うことのない文学作品を取り上げ、教材としての可能性を示唆していくものではあるが、教室や教科書(のありかた)を否定しているわけではない。学習者には、授業で取り上げられるような作品に親しんでもらい、そのうえで決められた範囲の外にある作品に手を伸ばしてみたいと考えている。決められた範囲の外はあまりに広いけれども、手探りをしながら読んでいくことは生きていくうえで大事な力になるだろうし、何も言えなくなるような作品との出会いが、そのひとを大きくすると考えるからである(そのときすぐに、とは限らない。時間のかかることではあるが)。取り上げている作品は、狭義での「教材」(教室で、学習指導要領にあるような目標を達成するための材)としては、不適と言わざるを得ない。ただ、より広い意味での「文学教育」の「材」として、その可能性や有効性を示すものであるということとは許されるだろう。(鈴木)

【参考文献】

- ・『江戸川乱歩全集』第3巻、講談社、1978年
- ・寺山修司『畸形のシンボリズム』白水社、1993年
- ・中井英夫『磨かれた時間』河出書房新社、1994年
- ・新保博久「解説」、『江戸川乱歩全集第4巻 孤島の鬼』光文社、639～649頁、2003年
- ・佐藤深雪「名前と身体—近世小説と乱歩」、『国文学解釈と鑑賞』別冊 江戸川乱歩と大衆の二十世紀』至文堂、158～166頁、2004年
- ・安智史「江戸川乱歩における感覚と身体性の世紀—アヴァンギャルドの身体」、『国文学解釈と鑑賞』別冊

- 江戸川乱歩と大衆の二十世紀』至文堂、191～199頁
- ・田口律男「江戸川乱歩『孤島の鬼』論―「人間にはいろいろなかたちがあるのだ」」、『都市テキスト論序説』松籟社、143～155頁、2006年
 - ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 国語編』2008年
 - ・『日本随筆大成別巻 一話一言』第6巻、吉川弘文館、1979年
- (2016. 8. 4 受理)